

なんでオリンピアが観覧車から飛んだのかずつとそのことばかり考えている。

いや、落ちた、かな？

落ちたと飛んだじや似ているようで全然違う。

落ちるのは重力の法則に殉じた自然現象、飛ぶのは羽ばたく意志。

遊園地の空気は不可視の毒で汚染されている、普通の人間がここに入ったらもがき苦しんで命を落とす。私は大丈夫、人間じゃないから。

オリンピアと最初に出会った時、私はあちこち壊れていた。肩の外装は剥がれて部品が暴かれ、至る所でバチバチ放電し、右足はびっこひいてた。

自殺？ 事故？ どっちでもない。

白い肌で羽織ったネグリジエはズタズタに引き裂かれて、ご主人様が持つてる本に載ってたロールシャツハテストみたいな返り血が飛び散っていた。

私を壊し損ねてがっかりしたご主人様の顔はよく覚えてる。

「なんで一緒に死んでくれないんだアンナ、お前は俺の××じゃないか！」

最後にご主人様はそう叫んだ。

アンナマリア、それが私の個体識別コード前。ご主人様は略してアンナと呼んだ、私の前にいた猫の名前だつて。

私はアンナ。ご主人様は……思い出せないのはエラー？

ご主人様のおうちを出てからずつと歩き続けてる。

高級セクサロイドには帰巢本能がインプットされてる、だからもし迷子になつてもひとりりで帰つてこれるの。だけど私は壊れてるから正常に作動しない。

壊れたら壊れたまんま、ずつと歩いてくしかかない。

そうしてびっこをひいて歩いてたら深夜の遊園地に辿り着いた。ご主人様の部屋の窓から恐竜の骨格標本みたいなジェットコースターのレールや巨大な観覧車が見えたのを思い出す。

今はジェットコースターも観覧車も海賊船も闇に沈んでいる。

遊園地の周辺はすつごく静かだった。無人のゲートを通り抜けるとファンシーにデコレイトされたメリーゴーランドやコーヒーカップのアトラクションがでむかえる。どれも動いてない。死んでる……眠つてる？

「あんた迷子？」

声に反応して顔を上げれば綺麗な女の子が立っていた。

腰まである長い髪は毛根が青、先端にかけて水色に染まる不思議なグラデーション。

長い睫毛に縁取られた瞳はオパールみたいな七色の光沢を帯びていた。

その子は私の正面の観覧車、地面すれすれのゴンドラの上に腕を組んで仁王立ちしていた。

「とろいなあ、野良セクサロイドなのかって聞いたんだけど」

「野良……ご主人様がないって事？ だったら野良かも」

「自分でわかんないの？ 捨てられたんじゃないの？」

女の子の肩が片方吊り上がる。表情の作り方がすごく上手。この子はきつとすごい高級品なんだ。私はほんやりと女の子を見返す。

「ご主人様の生命活動は止まった」

「なんで？」

「窓を突き破って飛び下りた。事業に失敗したって言った」

「よくあるパターンね、しょうもな。道連れにされなかっただけラッキーだけ」

地上十階、ネオンの海に背中から落ちてくご主人様を思い出す。

「あ、ちがうか。その壊れっぷり見ると一緒に落ちたけど死ねなかつたってとこ、凶星でしょ。最新型は耐久力すごいもんね、タンクローリーに轢かれても無傷らしいし。名前は何？」

「アンナマリア」

「私はオリンピア、セクサロイド専門の娼館から逃げ出した。ここは私の領地、抜けてくなら通行料とるわよ」

「通行料？」

「現金……はもらってもしょうがないから物々交換でパーツね」

これ以上とられたら困る。だから断った。